

琵琶湖への提案 - その2 「冬季漁港での集中駆除」

琵琶湖を戻す会

< 背景 >

琵琶湖には今なお無数の外来魚が生息していますが、年間を通した移動経路など生態の多くはまだ解明されていません。そんな中、琵琶湖で釣りによる外来魚駆除活動を行っている市民団体「外来魚バスターズ*」の長年に渡る地道な活動の結果、北湖では冬場に多数の外来魚（特にブラックバス）が漁港の中などで越冬している生態が明らかになってきました。そこでこれらの習性を利用して外来魚を効率的に捕獲できないかを模索してみました。

(* 外来魚バスターズHP・・・<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/gyosei/>)

< 概略 >

琵琶湖では冬場に外来魚（主にブラックバス）が密集している場所が何ヶ所か明らかになってきていますが、それらは冬場の季節風による本湖の波の影響を受けにくい位置にある港湾内や、温排水の影響を受けている水域や水路などです。決まった時期・場所に外来魚が集まることがわかればそれを捕獲に有効活用しない手はなく、特に障害物の少ない漁港や船溜まりはそこに集まる外来魚を封じ込めて効率的に捕獲するには非常に好都合です。そこでここでは漁港などで集団越冬する外来魚の習性を利用した捕獲の実施を提案いたします。

< 方法 >

今回の提案では捕獲方法については特に限定しません。それは漁港毎の形状や利用形態によって状況が大きく異なると思われるからです。捕獲方法の例としては漁網によるものや電気ショックによるものなど色々と考えられますが、小規模な船溜まりなどでは入口を矢板でふさぐなどして船溜まり内の水を抜いてより確実に捕獲する方法も考えられ、今回ここで最も推奨したい方法でもあります。

< 効果 >

今回の提案では以下のような効果が期待できます。

効率的駆除：現在わかっているブラックバスの越冬場所の殆どが夏場には生息密度が低下しており、冬場に限り周辺の水域から集まり利用されていると考えられる。すなわち越冬場所で集中的に捕獲を行えば、夏場により広範囲で捕獲を行ったのと同様の効果が期待できる。また冬場に集中捕獲することは翌春にその周辺水域で繁殖したであろう親魚の数を抑制することにもなる。

観光活用：漁港を漁具に見立てた滅多に見ることのできない大掛かりな駆除活動となるので、作業を現場担当者のみで行ってしまわず、広く一般やマスコミに告知することで観光ツアーのコアイベント等の観光資源として活用すると共に、琵琶湖の外来魚問題を広く世間にアピールする貴重な機会としても活用することができる。

地域連携：漁港での大掛かりな駆除活動は地元にとっても大きなイベントとなるので、地元の学校などに呼びかけ子供達がイベントに積極的に参加することにより、外来魚問題の啓発効果と共にコミュニティーの活性化にも結びつけることができる。

環境美化：多くの港では湖底におびただしい数の釣り糸や疑似餌が放置され、また幾つかの船溜まりでは湖底に沈船や不要漁具等が放置されている場所も見られるが、このような場所で外来魚駆除作業を行う際には撤去が必要になるため、漁港湖底（ひいては琵琶湖）の美化作業も兼ねることができる。

以上